

料の「鉛丸」に見えるという見立て表現となっている。

「3 大宰府謫居三期（延喜二年（九〇二）春〜延喜二年（九〇二）冬）」

この期の作品としては「496奉哭吏部王」から「513偶作」を想定している。この期の作品群の特質として次の二点を指摘したい。その一つは、「仏教への傾倒」である。死期の近いことを悟りつつある道真にとって死後の世界に心の安泰を求めようと仏教に心の支えを得んとする姿勢がより鮮明になり、仏教用語が詩語として多用されているのがこの期の作品の特徴とうつる。そして二点目は一点目と深く関わるが、死期の近いことを自覚しつつ、我が日々の謫居生活に何の好転も見出だせないことからくる諦念、もしくは、意識的にそうしようとする「則天去私」ともいうべき心情に裏打ちされた詠作姿勢が見られる点である。大曾根章介氏の言われる「現世の苦惱を払拭し超俗悟脱の境地に近づこうと真摯な努力をしながらも、遂に果たすことの出来ぬ弱い人間の姿が現れている。」⁽¹³⁾や「心情を率直にしかも平明流麗な語句で表現した晩年の詩篇は、至純最高の詩境に到達したものと見えよう。」⁽¹⁴⁾と指摘されている事は、主にこの期の作品を指しているものと思われる。

この期の作品として特に注目したいのは、二章で取り上げた「514謫居春雪」の直前に置かれている「513偶作」である。

513 偶作

病追衰老到

病は衰老を追ひて到る

愁趁謫居來

愁は謫居したがに趁すがひて來る